

『社研月報』の500号によせて

研究参与 麻島 昭一

『社研月報』が500号に達するという。めでたいことである。創刊号が1963年10月であるから、これまでの存続期間は41年3カ月という計算になる。思えば随分と長い間よく続いたものだと感慨深いものがある。

第100号記念号は1972年1月、江沢譲爾、石渡貞雄両氏の「寄せて」と小林義雄「発足前の社研の思い出から」、「小林良正先生を囲んで」（聞き手加藤幸三郎、森川喜美雄、殿村晋一 3氏）が掲載され、第200号記念号は1980年4月、大友福夫「研究媒体としての『社研月報』」、池田博行「よせて」、社研の年報・月報の目録と執筆者索引が掲載され、第300号記念号は1988年7月、三輪所長はじめ10名の寄稿があり、月報201～300号の総目録と索引が掲載されている。のち『社会科学研究所40年史』を編纂したとき、これらの節目に掲載された「思い出」が役立った。

そして400号(1996年10月)の節目には、なんと拙稿「戦前期昭和電工の財務」が掲載されている。当時、投稿した私は、校正段階で初めて400号であることに気付いた。「いい番号だな」と思ったが、それ以上のことは浮かばなかった。今思えば、もっと喜ぶべきであったと後悔する。私ばかりか、当時の編集担当も節目であることに意義を感じなかったようである。400号の番号を貰って発行が済んだ後、私は節目の番号を個人論文で使ってしまったのかな、とこそばゆく思うようになった。おそらく『月報』は今後も延々と続くであろうが、節目の一つ400号だけは非記念号であることが歴史に残ったわけである。

もう一つの思い出は、前掲『40年史』編纂にあたって、古参の先輩所員による座談会を開き、社研活動を回顧していただいたが、『月報』に対する思い入れの強さを知ったことである。初期の『月報』では「不完全主義」を反映して、気楽に書き、長文でないものが多かった。まだ発想段階のもの、議論を吹っかけるもの、自由に一寸書いてみる、そういう「不完全」が許される場として月報利用が意識されており、それへの郷愁が感ぜられたのである。時代が下がるにつれ、『月報』の内容は変化し、完成した論文が主流となっている。今でも、紀要よりも早く掲載されること、発表の場が少ない若い研究者へ門戸を開くという点はある。確かに現在の入稿から発行までの期間は非常に短く、よい印刷業者に恵まれている。

ただ、『月報』にもアキレス腱はある。初期から執筆遅延、途中下車、刊行遅延が発生、定期発行に苦しんだ模様である。不定期発行が日常茶飯事の時期もあった。編集担当はさぞ苦勞したと想像される。私が所長時代にも原稿不足がしばしばあり、編集担当は毎月の定期発行維持

に苦勞しておられた。他の研究所を見ても、たいていは「所報」であって年間発行回数は少なく、「月報」は社研と人文研だけだった。「月報」を謳う以上、年間 12 回の発行を維持せざるを得ず、原稿集め、刊行管理も大変である。それを見かねて、私は毎月発行にこだわる「月報形式」をやめて、不定期発行も可能な「所報形式」にしたらどうかと、事務局内で提案したことがある。どんな議論をしたか忘れたが、結局、うやむやに終わって変更はしなかった。もし「所報形式」に踏み切っていたら、今頃、まだ 500 号には達していなかったかも知れない。毎月発行の義務感がなくなると、発行はルーズに流れ、回数の落ちる可能性が高い。もちろん反対に原稿が多くて、年間 12 回を超える盛況が実現したかも知れないが、多分そうはならなかっただろう。嫌な言い方であるが、「月報形式」の維持が定期発行の努力を呼び起こし、『月報』を通じての研究活動の歴史を支えてきたことになる。今の私はやはり変えなくてよかったと反省している。

現在、私は「研究参与」の末席を汚しているが、研究参与にも年報・月報の執筆の場が用意されている。時折、ご厄介になって感謝しているが、600 号までは無理として、もう少しの間だけお世話になりたい。『社研月報』の一層の発展を祈る次第である。